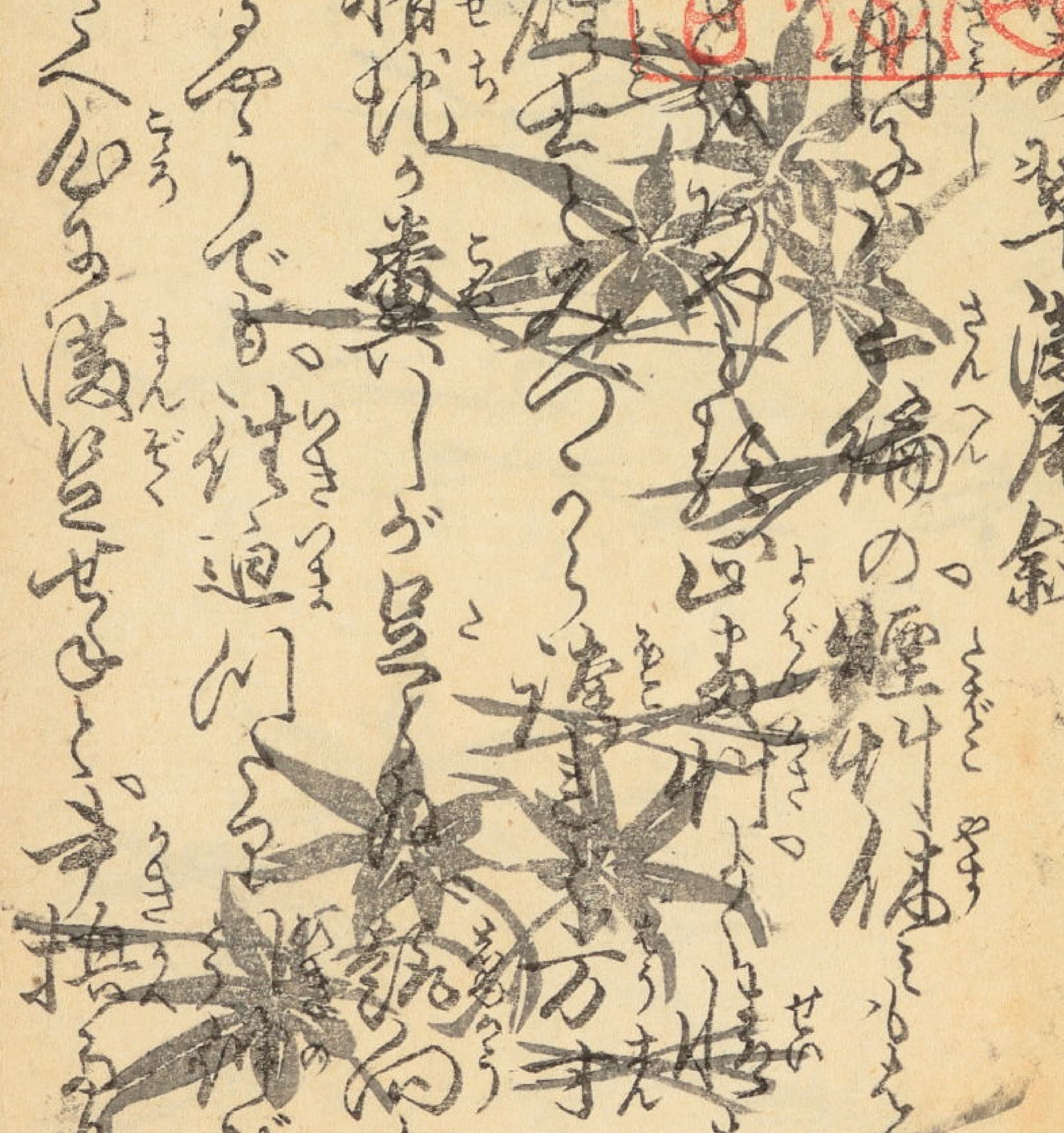
清涼和歌集

へ13
3158
4ホ

滑稽の翠蔓尾叙

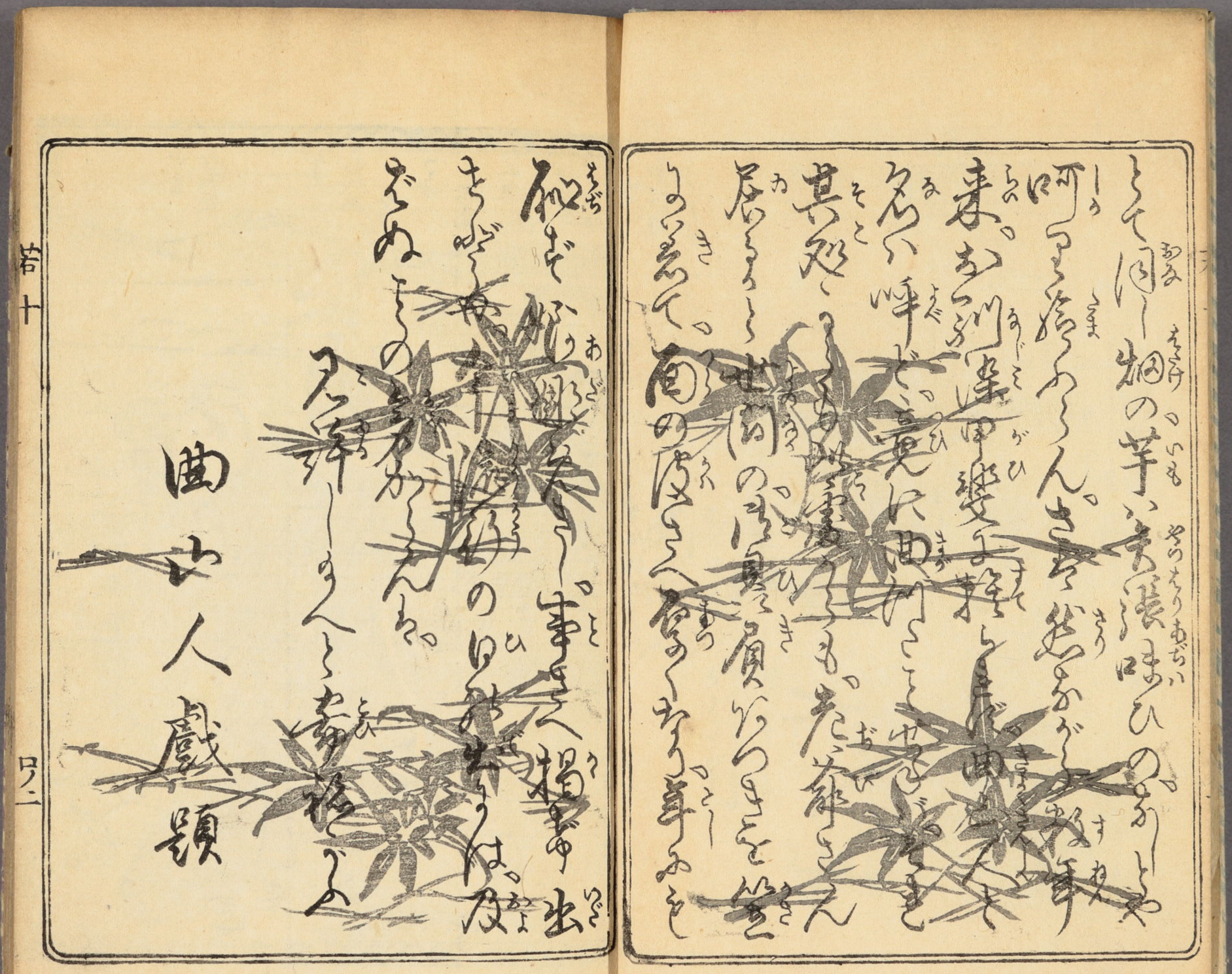
さても此の冊子は三編の煙竹備きぬえや
遥子が…ゐや…山あや竹
出及作者達ともみづつる浅草まゆ方寺の。
古状痩せ滑状の贅異しが足とも緒向を
どうかおうあつるでも往返门…ぶび
そりつまらん人の後…とせらと手拭





門 へ 13
號 3158
巻 4

昭和九年九月二一日 購求





曲亭人戯題

鎌倉右大臣

実朝を

うがゝえ

ゝまば

伊豆の

海や

沖の

小島よ

なきはな

るゝ

歌坡

於政

茶坊女

於万

新家

佐重

茶坊

好子

於千

墮落金剛山
念彼觀音力
如日
虛空住

# 清談和歌翠巻之十

## 第十九回

○

とゝ人の性い弱く不。天より稟体所ふして。半病貧窶人間の世界。喫恩邪ふい学界ふよりゞ。さまゞ苦貴へくして。却て奸佞邪智あるものあり。或ひとゝ身体弱くして。賢智聰明い寡ふ。正道ふしして。その人。潔白ふ。辱ふ。故不忠不孝ふ。

天禀の所為にて。表へ出てあるべきものにあらざる。
不お沢い主人ある芸雲の容子何とあく。心ふかる
ものの在不。今まで永き年月ふ。曽て詞を発せず
こと有く。也扨有りしもこの時ふ。主人がいふを也受
入ず。主より暇の出るを以て。こて不暇るのハ何と
や。蔵ふ去る乃犯ふ有あらう。心ふ快らねども。仮
初ならぬ五六年の勤めてたのこの執成あるまふ。世るの
人もこふ初のこと。隣へ主人の詞ふ背き。明日一日暇

こんこと。何ふ不お思ふるべきこ。心をすまして芸雲に
むひ「たこ」何と此作きく也。何様もこの仕ふ私
ハ。宿へ下るこハ出来ません。只今也中に通る月日
ぜ本ふ居ろ。お人が来た。その お元の対ふ。何
処へ也 来ません。芸雲の若お形麗ふ。畑の陽ふ
を焦ふ。こ。まこ物迄の仕ふ暇ること也。そ。こ必お指
揮不犯せませうト云ひ切る面魂ハ。あらく例
のお沢ふ。云ひ迫る京物あるバ。芸雲也今

ち權威を以て。退るとあらとゝ思ひ。思地ホ笑ひ
を含こて「ア」マア沢が作ひらゝ。抜き走つていふい。
大々吉俳が行拾うまるゝ。業ドてのてどゝいう
うゝ。おゝ〳〵仇ホおりひませぎ。まゝ本店ゝ素
さゝて。恥麗ホある沢もるのが。吉俳一人で振る
方が。些如合もちゝ考うぢゝう。どうせ眼を巻ゝめの。
宿〳〵下ひまゝと云ゝこのサ。ゝゝ吉俳の考う志去た
ゆ。主人ゝとおゝ〳〵業ド過し。大ゆホかけて吉拾云



考る志い癖のヨトいまゝてお沢ゝ考ゝを入ると「吉拾
云作まゝ〳〵ゝ行ゝと考ゝう。おゝ乳の毒ホおのひまんが奕
ホ考癖のお刃のうゝ。行拾あるゝゝゝゝゝゝ中ゝう。
忘まる間いどゝいませんの木。切拾結ゝゝ明日ゝ考う
て宿〳〵下まゝ云作ゝう行ゝう行拾ゆ乳ホるゝゝ
ゝて。彼ゝまゝうし拾拾ホ。障ゝまゝゝゝう拾免拾
ゝせ。只更ゝて お沢ひまゝうゝい。他のゝゆでゆどゝいま
せん。ゝゝゝう仮令行方へ。お宿拾を拾ゝさゝうゝゆ。

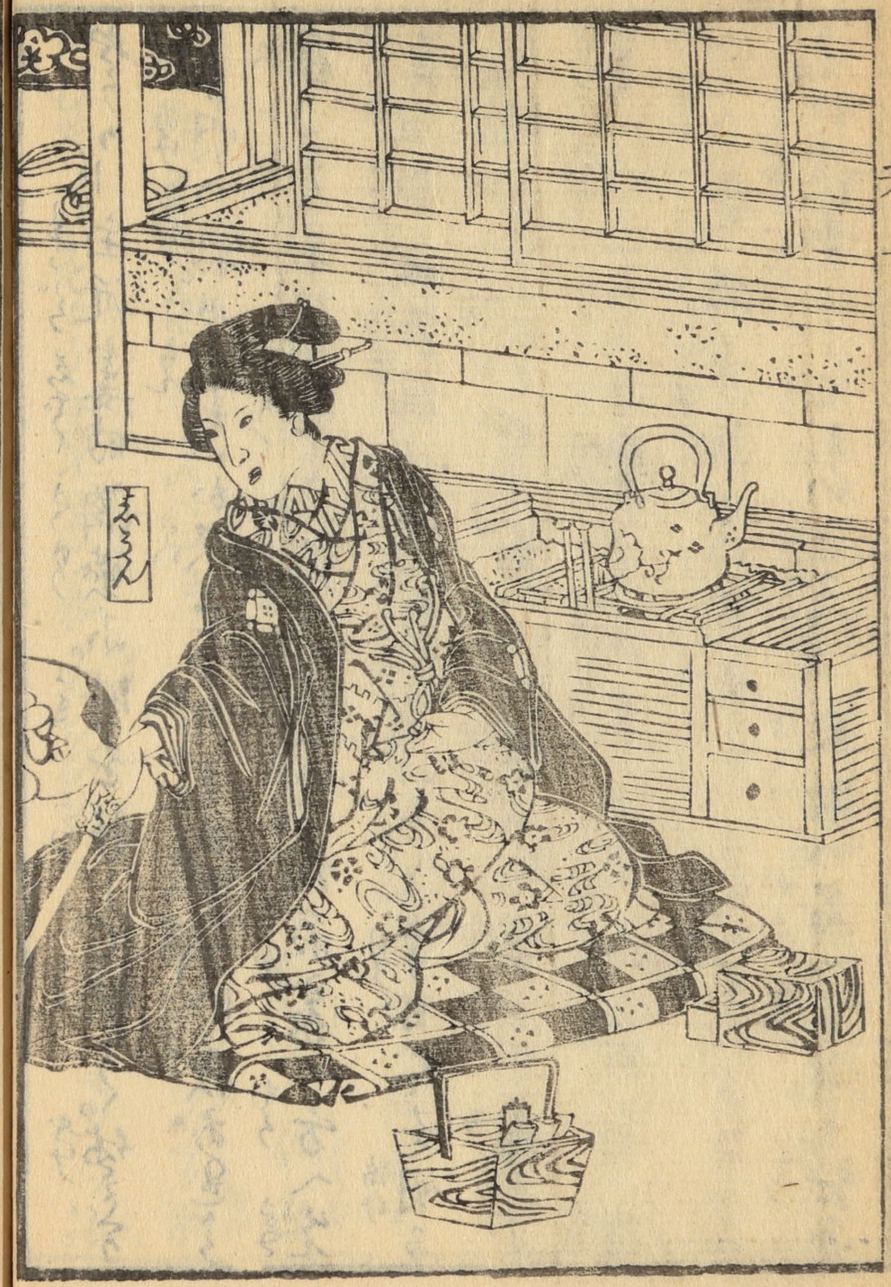
お一個でふ入ッ者やうまでも。お人がおくいなりますんにまいが
分の幸あるべくいけまてふおゝ仕ひ拵まして下さるあるゝ有
難うございますて「そんなとい隠しく悪い伝切ものこと
迷惑さまとてふ。あのゝ人を仕ん部ん。悪くいこゝろバ月
産ひふでゆこと。そこ前ゝひ拵ふ天窓。誰ゆ拵へて呉
ま人ゆあるまいど方拵してこゝまでも知つてる通ゝ。外晩毒
ある親者さん。お堂のおの赤坐ふ長ゝ。往来の人ふ
合カうけて。その伝んを忘ま。ゝ。苦い時ゝ共ゝ



造ゝ罪も消やうと。まア方拵さる積ゝぞゝ方
拵ゝつて長て呉ふ。ゝ稼ゝふ果敢あの働ゝて伝
ぞゝ乳指ゞ変ふあゝて。伝ハまゝとゆおゝ法ゞあゝる。
些ゝゝ漬て呉ナ「ハイ〜ゝんふ私ゆ一向気ゞ出ま
るんぶゞ先刻のお穀とお煮染ゞ。ゝ殘ゝて長
まゝ。ゝけ。箇拵ゝふ時のお気ゝゝ。ドレゝお煽を
漬ませうトゝ人百雑ゝ沸る湯ふ。ゝ矣出来ゝゝ
と持出せゞ紫雲ハ一人で二ゞ。かゝて抜ゝを沃

不為し紫サア為あ申一寸ハ阪ハ。二人新して酒肴を寸
のも今歌限りふるう雅先い知もぬ人の家。ノハ
互ふ吉拾ぢハあいう何ぐ〻ぐ〻壊の衣作へぐ〻食
乳ふかく〻ますね子。仮令四一新ふ居ま先ん〻て。ハ
恐ふ成と私ま〻。毎日の空ふお尊ねやて用を
見てあけまん〻。手拾ふ細いやうるゆい。ハ卒
衣作て下さいまん紫ア〻〻わんふ吉拾ど。ぐ〻胸
が如く〻さると。責思痴さいひゆすのサ。ドレモウ〻語

やうト主従妻時酒肴ふ。時を殺して快よく。体こう
ぶ明の物。紫雲ハか沢をうちまゆき紫ア〻ハ夜あ生〻
様つと為いで。稚く〻一個で考へぐ。仮名家の方へ先
達ま。香波た拾ハ云てあいぐ。いよく〻今日こを明る
と。佐文も云てやう為いく〻。定めて紫ドて乗るぶ
ら〻。何をいふも繋ぐ縁。見く〻世話ふ由るり猪
ぐ〻。今物香波をのこを。新く〻して歩ら〻とさく〻
と。口読書いてあいぐ。他ふ助い為く下る。他ふ


まさえん

主人を
案じて
お沢
分身と
化む
おさハ

仮ひ小きる者が有い。おあ寸処を仕舞ふ。太儀あぐら一ぢり。この文箱を開けて見ふ。然してお主さんが安ふ。ふ。知つての紙を剪して見ふと分からぬて指のうち。時後ふの容子といひ。云ふふの猫の爲にしさ。何でもこの方を立ざけやうと。工夫あるも程気ふかる。徒れふ差じ！思按して一ハ行く何の造作もなの。恵ふ徒てふ糸のませうが。マアく丈ふ何ふかふ。海での沈ふ抜ぐ一ません。常ふふふふふ

仮名ふふの。四文掃ふあぐふ歩猿のお気い。知ふて知いて入ふ。仮令ふ知ふるどお知ふせぐ。ふいふふおー四等宗ぐふ。ふ一ふふちゃアぐぐのません。珠ふふの以今月の多四ふ知でぐぐのまふふ。大ふふ今ふ旦形さふふ。四形造さふふお支個ふ。お一個いふ出ふさらふと。私い存てきふまふ。扨角条つて出遠つていの役ふ四五まふすまへト吹て尝ふ云へ様ふて恵一ふんふ主方い変明ふの。吉俳笛ぐやふふ原祇ふ主を。指

云ふ方が落命で。さぞ歯痒くも思いなされも
縁あり給方ぞ。サアその主人が悪鬼ごろう。分る
と逆くふ。更い簡指せい方指せいと云て目覚とい人
ぞが。何の毒抜ふ出て飛るか。定めて方いゐの飛
やう。知らてあるから今とて。彫ーを使もこの身の一得
サアー吹うト面をもかー変りて見えけるバ。お沢い
方処へ平伏て「ゑゑ〳〵仰体ぞい。何で私がお主
きもふ。お指揮をせやらぐ。今指らぐ仰とぞ。

陰
お例を言ふ出て有るのぞ。吾でくありませんうち。
ふ
言おん易ぐそふ。方指中ゑこのぞでございます。サア〳〵今
速ふ言ふ出ふ。何卒四発あをだしまして呉骨
ふ陰稜ふ出て。紫雲もかー少し云の毒ふ光一ナニ云指
ふ絶云をせぐんと出ぞ。何指出そ出ぞ義理が悪い
とおゆんうう教むのを。右の左のとうふりのごうう。ツイ
吾腑内ん易ぐそ。此云を云て云の毒ごうう。丈ある何
卒一発う。滑て来て呉おさい「ハイ〳〵呉今来ぐ来ト

子舎へ這入て筆硯を調へ手拭て新切の文
あらうの口状箱を。出て来られ
何あらうお文個のうち中の文をつゝみあらうう。然
くおお帰んあるこ。ハイ〳〵さうしてまたトそのまゝ
出ハ出ようとゞ。ゴひまハせば紫雲が容子。何分ふ
海ざるとゞ。仕と態して暫くかゝる。お文を取て来た
さこと。偽りつゝておろうと。裏手の方へ廻りおくく
ゞど
大事のお定さを。編さこつい勿体あい。あと極まで



ふ所作りの。お雇けさうさふ大洒奴。彼の見のと
おりの。夫濃この身の通ひ。何ものもあるを大せ
ない。思角さうち時刻伸る。おかひけらして仕て来
さうと。自問自答ふん方
由。何時ふかさうて後髪。ひら清く山地ふ五足六寸あ
こ。さ処ふ立ざあり。乳を把直してまく考行屋所
の羊ふ所業。る。ふ行く。弟ハ来く。隅田川堀を五
六町。喘くぞあさふけ

## 第二十回

紫雲いお沢が出てゆく。後新を見送りて。不思議と
縁うう五六年。彼かふいのの。何も落葉を
忘せぬ。いさで一妻の奉公人わの。彼いの実義のの
があ。今日此のこの身の容子。何ち怪しく見えるう。
方一通のこもあること。楽しる有ふ何指ぐふして。
傍を離ぬ所ぬうこいの。実意いよいく知りあがう。
丈ぶい何指も女でこそあと。身の一分がこそ私を脱

を立こう叱つこう。仏ふ由あい法利。指く例こちぐこう。
道より帰りて者ハせぬう。指しあまこぐけ云ここうぐ大こく
先こく待ぐあこう。変ふお沢ぐ志。決しここ生こまこふ私
ぐくこ。独猪しこ賜ふ除却む。候を種ふおしぬぐい彼見
ぐこう。ふ人が来のこ如。思こ由こ赤意ふふ見情ふ
資指を究こ身ぐ。今こ何生ぐ日ぐこう。片指
ぐ文くこいこあぐう。仏間ふ入りこ生ぐ。ふく由縁ぐ准
彼の白ふ独。思おくこ生ぐ処ふお歩う。編こう時こ

無殊に揺と身あい光えてまぐらの中居るのを
驚ひふ。こを通まして今さらふ。何処ふ住居ぶ出来
せう。恐を曝しこそのうくで。骨ふ刺るまで安実の罪
業程を苦う赤い狗猫と。陰猫を生まうよう。
深世ふ用き鞘。死んでんの潔白を入ふ知らせこき。
疑ふてふ迷生を。つこして自害いくしまんこのん猫を
佛さま。あいまとおがめんぐぶ未来ふ何卒安者の清ち
とせうへお孝引。修羅の苦難の助るぞう。ひこふ形ひ



あげんと一人不孔ふ看紙し。形て手処ある絶刀
を把りのくよう早く吠へ突立んとするその所へ隔
紙きつこと蹴破して。踊りへる金五郎。その表ひそ
ぞ絶刀を奪とて後ふ投すて「ヤレ早まるまく。
いふ日人の製白をいんせやうこのこの自害。まづ一
通りい去ふ。吹ろけまど方指でまい。何故とい
ふ本居で。こまく母子が言合せ。別合てしこのど
こ。理非ひつこ表侍こ陸。異い所へ水隔る

と。辯言への巧みのその仕方。時宜ふるつてこの者俳が
徒て。主人を招め俳諧ふ由。ふ人その歌を云て笑せ
納得させうと云へけ見ど。左樣して孤を願して由。
さて文法その人達のおあい世話ふ為ふ。痛し
痒しとい不程ハテ何樣招うして不宜ふ由。花を持
くるの時末を。対うと云ふ。此此雅と考へ。サテ
言思按ゆ出あいのもの。ヤテ今日い明後日限
ふ由ふうと多。まず結取ふ者と人ふ。熟對して一理

屋とい不ばいが彼ふ云て笑して彼ふ彼ふ
の彼の分別と。来かふ誘ふ向ふふ。悪せ紀と来るお
誘が空にふ。ハテ何多の出来とうとしゆつが固招くヤ此
ふ。桃ふく。お使ふ。出い出来モレ万一。ふ不ハ
ふ由。ふ流ふて。吹ふい吾俳ゆ。全痛しく。
傷バ今回の云新あさふ。命を奉ると
文俳ふ大変と。遂て奉て。ハ人いその所

マアく、こゝもで互ひ生命の殺いい女の持まへ方相
者
ろくゝ由おらいぐ。死ぬくい最大おうん切つ。まづ答ひう
と考へまば。あるく左相い死をれ戒名ト親の中陽
ふ分の元て「男の彦いう張ぐ。きこ物振ぐ初のま
せんが。今田のこゝをの糸日ふ。約束をして舌の根も
乾う私百ふ男と一所ふ。亡命ことと初ゝ色ゝ。親教
縁者の屋きば除て。その云報ゝあう生せう。更ふ男
小吾俳ゞ粥。承知のうくと私を他ふて日疑ひ生使
金く他人ゞくあゝ。まゞ納菜ものうけれ前。お乳の毒
ぐと原面皮。云ても罪ぞうゞ本后ふ。この年表の
悪が十分。何相しとの信きゝ色せう。形して助けて
下さゝ。嬉しいぞうゞ情あい。何率死しれ下さ色ト
ゝ。結る一徹心。金立弟い押へる。多ものゝ敬ぐ報
さ一報ぐ「イヤ何相して死せいしあい。今おおのゝ新。
ぞうゞ百死の相ぐけ色ど。ぐ処が別ゝ箸の。殺いとゝ
ぐ何ふて。大分逆とゞ居る容ゝ。コレ お沢や 吟味と

一杯。汲で来て下せ〳〵ト水を乞うて嘗て不飲せ〳〵
まゝ篤と先後を考へて見るが宜。任意更に本
居へ。金く義理が滅多いおもしろ。更が為おおが死
殺ば。お政は立派お親殺しサ。仮令を下して教
さんしまし。その分解は五厘もの。左程して見れば金
のまり助も。嫌を殺しと理不あらして。両個とも不大罪
也。助も嫌を人逆磔ゲのはあり。いつおも多年の恩を忘して。家
を捨て縛を無い奴。といふ。悪気の源。諸々の分

ふ。もそれのあること。譬バ一家の過ハ。まこと改める時もあらん。
後く月出しく再舎する。打もあらうがおおが死だ。消
息ぐく無い両個ハ。実ハ天下の罪人。さるのを不仮と義
あさうれう。勿論不所存不悟ものゝ。悪悪を加て
紙もあハが。此元が死で向ハが罪人迄で本居へて
気の毒おとこと。貴生ハ世ハ為ハ。旅
まり出来と紙でもあるまの。手処で吾俳が義ものゝト
え〳〵爵で舎める金五弗ゲ。実ハ不為居て。苦笑ひ

まてそうち点検「実ハ吾儕い一途の子等。で本在へ帰あいと。おらんさうで金まだ。弄ぶうとまもしぶ。今陰しくの四夫人を咲くいた拵ぐぐのまうすこ。お設くとの痛ぬ。年来母子とあいとを加論帯こうして者形のの様ハ優しくまて呉こ。母とどんと実ハモウ。世由惜いとふあるません。様ハ今之所を妹の。そうと一個の方を紀念。子ようり可老くるくものの。今彩あいとの島ハだ。何方の果ハ居てれ



と。思言葉で居ます位その友個ゞ罪人とあるとと咲くいたのやうあ。ぶがあると。百死いしません。左拵ぶうのくれ「ハ」ハ左拵駆ぶうるくれまぶ。吾儕の大きハ安堵しく。サア夫ぶう白を拵ぶて居こぶ宜らうトいふ形愛へ動也しくと案内りろしの熟渋の。出る者の後ぐ愛へ通る。本在の伴弦出久助ハ本こそハ生管二人ま処へ居る史まぶうれお。出久助ハ大吉あげ。金五郎を流用ハうけ「陰居さん」と形こ。

おさハ
金次郎


太郎

イヤ、こゝも史ア釈ゲ[illegible]ウ。今日ハ全体我化彼此し車
き
力ゞら腔ふ ゞゝ。定めて様ハ挿図ゆうぶ 強きであらう
と云ふの外。あて[illegible]ぶ寂寥閑。毒所の猶亦一本
外してあいた。あの史不測。何らことを不ハ孔明のごとの。
徐計でもあるこゝ。池彫さるふと生管亢不ゆ亢と
つけて毒て[illegible]ぶ。北国ハあるこゝ。皇女弁のゆうふ
形。ものゝ彼処ハ輝こと。光るものを抛出くん
を何指しと現屈ぶエ。金処でまア。おの方ハのゆう

お迷ゆうがあいうて。ゆ。そりゆア吾俳苦の知られ、この
こゞこの此文死人流ゆう。今日まで不明て何方へでゆ立
退こと云て様しゝ承知ぶらう。その結取ハ素こ吾俳
苦のサアく逃異ゆこゝう。重陽ハ膳の陳ゝこまで改め、
結ゝゆうゆせゝゆう「こまゝハ皆さゆ苦い新を陳ハ吾
苦でぶいまん。お涙ゆ茶をあげゆうい。何ぶゆお
まゆが有滴こゝして。陳ハ困ゝこのぶゝウ。さて今
伴孔さんの社作ゆう。金承知でゆうまんが迷

ゐは世私の不来方ぐらう筒がごぐらいまして代通り。
まりくらく
箕石くまかう行ぎこのまくお渡しけす続いてゐ。
くで　　ら　　そな　あき
芝居はいらして居まし〜ぐ実ゐ女の濃きうかう。まる
さう　　きう　　ぐら
方招もまおりませど今しとあのてゐ箸宗とぎう。
ふく
粉お惜しくまかうませうが金く方招しく祝ぢ白
あり。爰ゐ居るのゐ新波きみの薄中。仮名家金
ぐらう
五郎とまうしまして私の名ゐ孫の兄。寒和
の祝いこの人うう。お吹ゐまとのてゐきのまい一五



このお方と拙合のうエ。そうもゐア大うく十月うう。三十日うう
の日迄ぐらうぐ。ゐうく方招い祝ゐぜん。うまづ一色うゐ
二通りの歌合ゐう。右ゐ左ゐサ。のうくこゐおゐうの影
ち和ぐ。丈ゐ勝ちゐアこの出久助が。見を選んぐゐ十通ゐ。
ゐぐう
二十通ぢゐアまう祝くヨ。丈ゐぐまぢゐ小気を揉して。
揚句の果ゐぐんくゐうまして。祝ゐ招ゐ気の名花影
でゐ。云言ちゐアゐうう見ねエ。祝ゐゐ新波きみの薄
中ゐ。世ゐかうう合ゐ祝く約そく色うゐして往年ゐ

世上の人茶流を見かつる事なり。金立寺は林を[illegible]
まづ一通りは手紙おのの書くべし。[illegible]
あるべきことを一愚中まで[illegible]のこと、まづ[illegible]
おお笑ふ世上はいそをてう浮出久助。生[illegible]
処不對居しう

清談和歌翠巻之十終

清談和歌翠巻之十一

○

第二十一回

紫下金立寺は進て出貌を改めて面ふくれ金立
さて拙者は新波家の後中。仮名家金立寺とまうし
て。紫雲が西郷のものを[illegible]ふ。今田のとかの相[illegible]
うと。今日[illegible]寺へ新。出境の[illegible]の為[illegible]
自害をいたさうとの所をまづ止て。[illegible]

きけばコレ、そホ。妻しの遺手こを子んてと。中ばホ周
て一流いてせば。まづ一番ろハ及ばホ。あるるあるとど
人一個。命を弃るハ容易あるまど。今ホ伴ばどのぐ
どぐろこと。あるる。拙者がまるるし。度とまあり。丈でも業を
が罪るて。粗疎ばいそまるあるる。まこ妻下の忍業と
仕者る。まる〳〵丸物を此方へ献せと扱把と拋り出。
まづ朝へ収める者もあく。尾筋の陋い用捨あるときて
こホある遺手の状を篤るる出境ホせへドさ一ハけ

らるとて出久助ば。怖〳〵ばて。こを扱いて生命と
夜個再ばこ〳〵後如〳〵「々あるるるこの遺手。立涙
不縁個をるる究て。その翌月ホ女児が七命。親の身と
あるてその位ホを知るあるハ訳ハあ。古振してるるこ業
てるる。他へ者るること新ば本居るる達ての面を。今さる
居とまりハるるてまづ美しく換換一。揚句ホ彩ごと動
りまば仔細ハ移くこと巧んば仕る。古振蔵ホ高るまて
ハ一ホが立以ホるるて三日限ホ流ばホこの限居面を。明て

除とゝ玉極志。その妻ろ不きゞき有まゞ左指して
又まゞ母子偶く。云合ーとゝ何処まゞも。悪名きえ数
その悔しさ。女児ゝ不悟を知らぬの。紙変有まゞも幸
赤の恩をつとすまゞて本店を蔡未ゝ世数その秘拠。
命を弃るんの城を。お棄ーあまゞとゝやを交倅。イヤ有る
ゞと紫雲どのゞん底い知ゝ有りゞ主人い何処ゝ何処
まゞも。母子相絶不遠ひ有。そのゝう安不男い狗拠何
ゞ紫雲ゝそのゝを。知ゝ絶ゝとゝ人ゞあゝのゝと一途の

脇立そゞまゞ不。モウ此ゝ構ゝ取ゝゝを明てゝ退
とゝ。義ゞゞゞまゞ送ゝ通ゞ紫雲とゝゞ。死ゞゝ
有ゝ実ゞゞ知ゝ取ゞあゝゝ乳の毒有ゝ。そゝゝ夫殺
明ゝゝまゞゝゞ。然ゝ有ゝ有ゝゝその疑ひ。何処まゞも解
まゞまゞ。然ゝ者ゞゝ有ゝゝゝ止ゝゝゝのをサワまゞ
死れゝまゞゝす狀不有ゝまゞまゞ。何ゞゝ主人ゝまゞゝた
有ゝ。今日中不この家を立退有まゞゝ支ゞ厚む。何ゝ
死ゞゝ活ゝゝゝゝ孫の後まゞゞ者ゞ分をかける不ゝ及

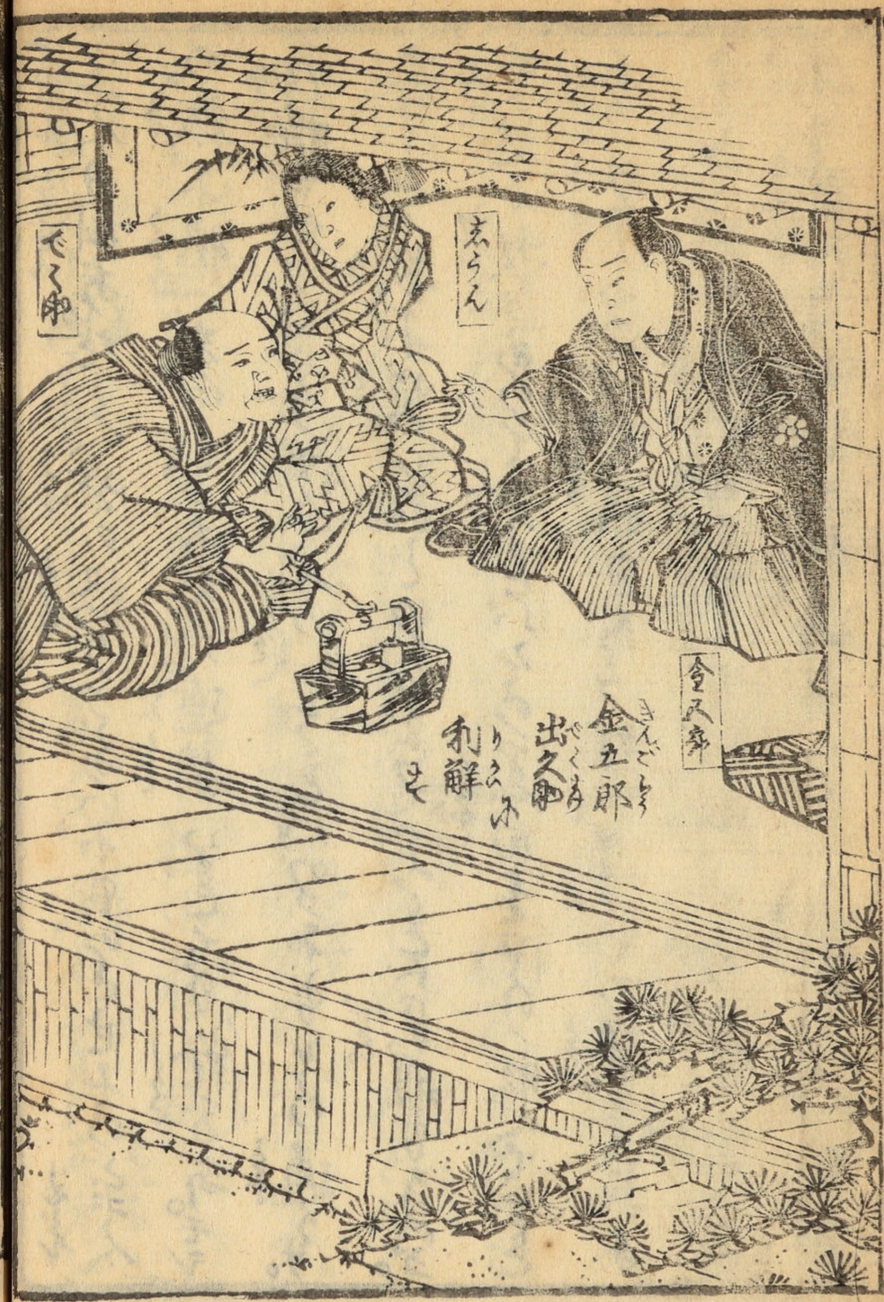
でゐるワサ。彼金毋子ゴ云合しと仕事ホ申しう彼ホ
ま申。盗こ候白を言こと云ハ有。彼ホ申死ぬホモア及べわ。
サラ〳〵そまとう堂ホ早く。応対て遣の肝人者ハ弟さ有ホ
て手伝て。夜具蒲団ホ墨こホ墨こあさまこ。ど申く吾俳
ら苦ホ手伝ひませうト手拭ホて夫窓ホ冠ま。風邪ホ
ビさちかまび一まア治ホせエ俳ホさん。あるゐどとうモア
妻組かまうこ五退ま。ラ宜らうけエど。今ホ申おゴいひ
ホま。主人いホ処ゴ申ホ。云合せと云うて居ると。

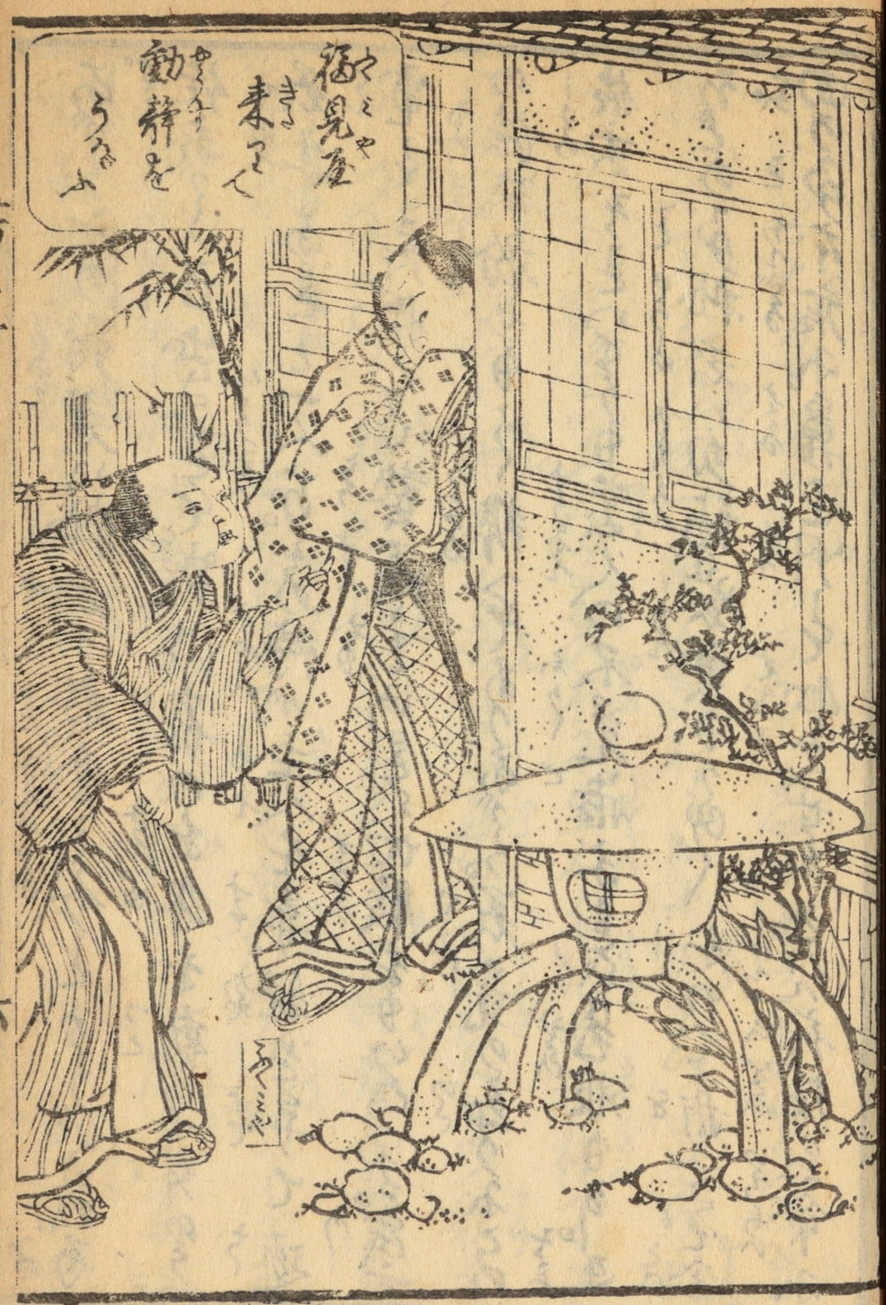
その一条ゴ減ホあいうう。堂ホ言い脳ホ死ぬ見悪。ど五ゴ要推
ゴ事試ホ。命を奪ワるこゴあらうゴ分解ホいホ程ホ。
そうこモ。ア言を五退ホい茶漬を食ま。弟いるワしゴ。そこと
ぢゆアホ程ホ義ゴ減。彼ハこ。女あくうホ義を立ホくを。
あんホ死義ホ手ま。ホ。町人ホ脳まうゴ。五あういかせう
ホ主人こ。おお方ホ連判して。変して母子いひ合して。彼を
ホ願ハこ決ホくあ。さう〳〵方ホ招い云ハ彼こ。妻ハく手こ
祝文。を紫雲ゴ名宛ホお遣ホせ。方ホ招きうモアその

祇明が立ちう。一時の名ホ元げけて。吾俳が方へ引取
まうせうトいえ世田殺ぎ出又脇ハ。所くしらち笑ひ
ちどお侍とらんのい。化と史ちう義とやうをとく辨ってご
ざうしく。を赤勝を をくいそまる。マア横ってのロ続ろ。
度くまうをと田贅云けまどの。隠暑ホ出ー接色祇の
史あげくうくて。裾ちと祇文同拍ホ。井対を出たくてが。
史アロ嘉池ホ史アあうまちそめ工。ち拍ホ稼く連んごて
を。云て人ホ困らせたとも。嘗書どのく身ホてちとが本居い



主人田同ホ。たくく嘗の裾ちがホりてせちの主人
の。機ホ悔ハ。あのてぐホまだ。逐掛ってその絵方ホ。モシ
左拍ぎ史アどざうませんう「そそとハうホもその通うサ。
あくくで機ホ悔ハ気とのちそてんそと見非ちうが。
ちそ処ホ殺ぎあのて又ちまだそ。その意向をうみ拍くどそと
ありけりまホ史アの拍田ホ。サテその通ちうのひホ
さうあうこの沢を云て咲きう。ホ政ハホホ方田ホりくの
通ち嘗云ぎ女児て。の拍ホりうと。孫ひわく身ホ


太郎
金五郎
出久和
利解


福見屋
来て
勤辞を
うける

あぐらの。その財産は拙者が所。金子とまうしたるもの有
ざる。任あぐらを召出されて新波家の主家を勤める身のうえ。
若年あまたと一人あり。その侍が主人を弄。親を弄して逐
電をまた。性くせ悪敷きけまた切腹をもひつる武士
の法式。給めもうく難へてあうあぐら。若気乱のありかたの
若未そまいぶうも業人の不義。非あまた。兄非あまた。丈
ひどの母拙者いかの論。業雲日ひく。和のて彫さを今
ゑ と ちんぎん
田の母本庄ホ。異を明と和ちく人せうと。現在獄の命ホ

ホ。抱る大事を承知のうくで。させる者うぐらう。方
招しと思ふまだ一向ホ。業雲い初ろ以ホ極まつる。まぐ丈
ひどの母親を。ひく人が者い在ホ。主人を振ホ相続つぐ
の。会せどのと疑ぐうく。今日ホ思ふつる時定。その報を
うく。少者のこころ。疑のい時こそあらう。不新者まども
血をまきと。和のことをかあ方ホ少を日行ろ。恥うさホ。
云ぐうホみまだ何時ろそ。縛が乾ぬうう除義あく
影を。拙者ホ胸を推量とあつて。主人へ妻しく遠ぐて

今せんとてもとゝ紫雲の証明さんとうとてあるゝ望不由あれ。
爰を明るい安いとト吟て出久助天窓を搔き「へて方
拍てどゝいまんたうお武家がゝとりのい。流嘆しうどゝ
まうすた町人風情い気楽ふうの。女児いあうう純の女房を。
連て逃てゝ人ゝ捉つて。若人同志の駆ゝ。元ゝつけば野
面の亀のふ。人不よのちゃア手柄のやう不ゝ旅由どゝう
まんた。方拍して又うゃア四子長さ女い。滅多不新い出さん
ちせん子。イヤ〳〵そうゃア怖い一件。方拍して又うゃ紫



雲さんが。実不新ゝ紫ゝ。のゝふ不ゝい紫ゝテ
宜どゝうまんたい出久助が。要相萬ゝうと春辺まゝとのひゝて
生駒を又ゝうて「丈ゝうナアそのこと志。因拍不要ゝ
お駒ゝまうしてその疑ひせゝ晴ゝあゝ。丈ゝゃア簡拍
せうゝう狼せうゝう。お掃撣のあゝどゝう。ドレ一ゝう住
て素ゝうト生駒を促ゝ立あゝる。表の方不人青ゝて
「出久助来るゝゃア及ゝ紫ゝトゝ人契ゝて「ハテ表ア
あの賀。良拍の賀ゝを雅ゝうゝと陳子と発ゝば

主人の福見る。二主人の使をつゝ「自己の腹より梅
しきゝ。何指いゝ形ぐさちり退うこと。ぶらぶらと素て見
見ず。寂寥として門戸の容子あるいサテ不測と修
遠入て庭にうろ。雅のさまを極く新今復古趣
と考ゝ。仙作新を吹て見るや。ゆうと紫雲が所為
で有。全く業人同志のこと。古指して見るや科白わ。
紫雲を逐出を歌の有。金解何指いゝ子のて
自一生見捨を不自出有。まて来ろゝ老爺え

の遠ぶ。仮令今回の一件ぶ。強ん巧んごとゝ出しう。
逐出て捨い形ぐちや。第系の佛へ対して紫海を
ゝ子ゝ子ゝ。自己業ぶ溝ゝ。考方達へ分対ゝ。
古指緒歌ぶ子ゝ見るや。何を腹を立ゝ。
変ゝて跡ゝ紫雲。まぶ縁新不頼ゝて「後不ゝ
歌ゝぐぐまゝと平自ゝ考ゝず訂とゝて「ゝ
何自云ゝこゝ。ゝ。実ゝ何ぐぐゝ云歌ゝ。知ゝ
指のその自打拾。ゝ保雲ゝ。ゝゝぐゝ。モウ知ゝ

自己の方が世間底悪い者が不図。お夏の方様が
ひゐ世。やれ〳〵四郎一体心。お夏の子助兵衛をしこまる
まく〳〵こまこと庫。四郎くんの落仮名家さんが高後
お見ゐかくらうとのひゐたまば金五郎の形をあら
ゐ待長ゐ

## 第二十二回

程なく入来る福見屋。金五郎を見て一礼あり「
サテ先ず悪い様で済みまく。仮名家さんが遠まて

初めてお見ゐ「方様のみお夏い福見屋さん。一体貴
ごらの来来様くお世話ゐまうまんて。お礼かくぐく
手あまる。第〳〵移ばあらぬ善を。ヲイ彼見と仮
まぎると四郎をおうちゐて。今さら面目もござら
ませね「イヤ〳〵何といまして。貴ごの世話と
いさをハ。亡父様のまう〳〵つけ。変して御のお礼
ゐ及びません義でござりまた。仮分ハ右の左。今
田い私ご。気隨をまうして主ゐ。貴ごの八

りの不及ばぬ。考へ云ふこと申最大の苦労。ハテ難儀やとは
双いまを務めのつとめれば双。ハテ。ハテ。ハテ。どうまもうが
見ぬ石屋こと新さう。形あるまいくおこの毒。イヤハヤ
そこに不孤て雲雲どのぶ。何の報う命を奪るの覚悟。
モシ万一この報ふ。こぶ見こどのやうふ。後勝しても
及ぎれ所を。形よく考云のお出ぶあつて。を難ふ海
まいこい私ぶ分ふとうまいても大僥倖。謀雲あいと
でどうまいこと。サテ貴人ふ云今日。まいくまいこて来



まいこぶ。実ふ一国の後立絡是。難既ぶまいのまでも。
まいこいこぶ鐘鈴ぶつこの上ぶ何が怪。何時まで
根ふかりひまぜう。呼とをこく考云云。作倉
ぶ下きのく。見まもの毒ろ云かこぶ。のこと考ふ存
まいこで解所まぐこう承る。考云きの四人配。こう
私ぶ腹立ちんぞの。歌こいた九を遣ふまいく。難今が武
家こ云いここく。恐毒いおまぶこ。四人中案入りま
まこと。の考と考方も面目あく。顔を拍て「イヤ

振舞を誰不陽うぢ。他人の耳お入をさくあいうち。
稼くまうし寄めて由。主命守ほ伴既ごめ家うく
ちち
不和いくきれもを。陽義あく明を務ゲ身のうく。稼
あぐう第うう出ぐ。稼あうぐうを詮方いあのト苦笑ひ
あて話る間不。雲空い茶を出し菓子を出。妻婚
のおうひ不系由悔く。老去きをば下女のお涙由。娘
ふん不教びて。猫の病由下るべし。稼ん座い見くあり
て「サテ私のことうまく。稼く用ゆ由ぐうまイ。



まの出嚊をいくできまをう。丈あうバ業雲さん。今由長く
いくあう。かあくうを気不持赤さん赤。弄ひ出久助由一所ホ
素ゆ主トうあ丈と不接拶して。勤迄くと陣ひを。麻
見遣うて金五郎ぬ。雲云ホ動ひ花元笑ひ「まぐ
年い業のけ主ど。町人あぐくも大家の主。あうく沢て
髪明ど。マス何ホしう縛う縁つて。お五ホ安ん。お
沢由こぐ縁びぐうう「藤ホく何稼あうまを
と。宜昔芳をいてまうぐ。ぐと。でい定めて思稼さん

の。お腹もさつぱりとあさりまゐらう。サテひらくのお旅
ひや。何卒見まゐのやうに私をお供ひあさつて下さい
まし。「ハアそりやア勿論サの考さ女の招ぶ笑笑ん
うのガまゐこと丈個あるのうの。今まゐこと遠ひお返を
居ゐ。うく気をつけて下せくヨ。多時さん仔細まる
ぬエ。「ホヽヽ お沢ガモヨ。美つくしく吾倆ガ対ホ。屋
煙つて居やうとする事ハ。実ホ困つてゐんホもあの。
ヒヤを云さう心つさう。さゐ所嫌と考つてゐる合。まグ

何のかもを云と。影〳〵と考つてそりやア宜ガ。で且吾気
ホあるのハ。金こく分ガ対のうへサ。世間知らぬと云さつて。
まさうそりやア男の児ゐ。半ホ馬ホ鹿まハ考女い
ゲ。旅他吾へ出るホ考の女を。連てハ絶ホ苦労ありのと。
他ホ笑ことのあゐ。ぞうゐモ千隔の対こハあることも。遠
若で何処ホ居ることハ。ゆきうあいうちい絶ホ
甘美あいトう得色脈の案ドい格別。同ドおりひの
金五郎。悪癖をバ口ホ出さゐど。心のうちの変苦

方。結る不組もあるべし。扨うちとくに持来りて「ハイお客
さまうちにを物トのひゝ穀立種六種。是指よう出し
並がとびお沢い出て不変良」「こりゃアおお百遠ひ
ぢゃアあへうエ何も吾俳どもうゝ俳へこえいきの
「ナニ百遠ひいこざへません。今旦那方五六人のお供と
連てお出あまして。紫雲さんへこゝをあげてくれう
と。此方のお名まだこを作まうこと「ヨヤ〳〵丈ぢゃアあ石
の旦那さまうのお客ひりのうまっモシ旦那さまこりゃア



まアお祝のうしまうトのひゝ紫雲さんへ「こりゃア旦
那お遠ひいあへ。お乳の毒ナ我〳〵こゝへ。金五郎さん
へよて呉ろと云作のどうう。マア徳取てあるこあせュト
ひうちう男い並べこ。返辞もまこで帰うあ〳〵「こりゃア
何ホしうく乳の毒ど。此方でこを初ゴ来ホ酒でも出
さうこのひ新。右の場合でそこも達うた。まう杉蘭
就しあるこうこを。返さまもあるあ〳〵。冷わ〳〵うち貴人
就ちるサ「沢ゃ丈あうお婦をうけホトこまうう重要

時酒燗ず。憂を慰むと雖ども。酒は憂への五葉。
少しも気さへ晴やうず。殆うして其の落魄ず。金五郎い
帰りけり。依て此の結柄い体顔をもとうお改い行と云く。
面ぶせある仙況いもとど。良人の様の身の落き流を。
強止ぐ〳〵て冥途へ参りう。逆のかる交毎ず業行られ
間者のうち。物不自由ずあ〳〵れやうぷんを為て出
々。塞ぐ物を〳〵あり流ゆて。面白う〳〵れも言笑ひ之筋
をうて〳〵と。合を之筋の青き〳〵一ず情坊二ず





強者。こいその言の言葉の。菖蒲山ず赤ども。夜
の契りを挑む者。十人十色の生碎客。千差万別を
〳〵ず。親子を者ず〳〵を憂苦労。そもより後ず彩象
の結を。以者ず加〳〵通ひ来て酒飲あそび
その交毎ず。加〳〵お政を拒けども。物おりひけん
その後い絶て之ぬく云業い出さで。普通と体
晒業のこず。今い表べき所もあ〳〵れども。その交毎に
一歩二歩。時ず無ども。新義の花。こもを辞さんぞ〳〵

金之妙


あせん

あけまぶ。おし頂きて例のごと。帯の間へ挿まさて。持て
帰まぶ入用の。ものむおつけて。あるく〳〵。紙へ拭べきかい
あるう紙ど。ろひのうるぎる恵ことあて時の君欲れてまとのこ
い。彼主の恩をとろ人とう。まことこの渡ゞ歩ありぐらを。彼
あい絶れ若芳さ。良人おいそで病人の。陳うあ〳〵ん
とて国番ふ。彼人を大慈観音薩埵。祈とぞ云ふ
ふあさ〳〵めさ〳〵と。密ふ記て彼を落と。祈るとさ〳〵
うけと。今日い西のとそぞ降て淋しきまふ病人の。



腹ふより副ゆ方八方の。闇しを有て走る食ふ。金て
分いこの程ふ。ろひの外ふ快ふく。年恙ふ多ふ運べ出ふく
て。今い仮さ〳〵程く盛ふ。二杯ふ絶るあどあ〳〵て一日腹ふか
づき。厠へ一人絶ふまゝふ快ふく。ありけまぶ。二個ゞ歩び
大ふ。ふあ〳〵ゞ。早く咲ふ歩ゞ行るあふ。あ〳〵ゞ病しき
と。あ〳〵ん。ふあ〳〵丈をのこ。後をけふ。かるゞ行ふ家
きふ。夢ふ。迎ひがかまぶ。降のふけゞいか客ふ
あ〳〵まいふと。紀縁ふせゞ。あるのを。命ふ〳〵

ども。今活中ハ手ぬるい。絵方あくてうまあり。
成ハ立ち続き。白ひして髪の丸もを。指あげ
あぐら箱舘「今日ハ髪の結日ざうな。髪結さんが
箱のうち。来てうるさ指ーうな。一風呂迷入
くさのしでも。化粧せうと箱さきて。モウ日中ハ
あつてうるさ。薬板へ行ようで。その身その手てこの天
窓ぢや。お座敷へ出ハい。左指うとこ云ん今うな。
ハハ。ハのて結ちや。手ぬ。絵ハ困らせる髪結ど

イロト考まる新へ来るお千「行ぐ髪結さんが来
あのとエ。行指も彼人ハ皆深うな。吾俳者の目
時ーぐうもヨ。ドレ吾俳が宜ようハ。指つけて
あげう指をお動ー左指ハエそうやア
ようー「ハ人ハ病人さ見ものこの沙ハ。丈遠宜と
ハハ。お前。お指の丹塗ハ。屋いてホンニ綺ーうう子
ーア塗ハ塗ハ。この方ぢやア近くハ。服ハ
ど快くあらとませうヨト鬘をそのうち髪も

ちこ。花鳥さくやそのく。不。美麗美かく。イ於千と
俱ふ。寂寞寂へとて歩て徒し。

清談和歌翠巻之十一終



清談和歌翠巻之十二

○

第二十三回

お政八塚孝夢の二階へあがると。障子をあけて。ヲヤさ
あこうと存ました。新家の旦那「お春〳〵自己だやア
恵へ。この通り雨が降の不。是も雑も流不者て。半
分降り否がらもお。素る白家も形へんど。ヲヤまア
旦那もとり気ざれ工。雅が否がうまんりのか。雪ら

今日も昼の内ハ二月ごろのやうに寒うございましたが。今
日も此様な雨が降りますから犬の子も出ハありますまいと。
思つて居る所へ口がかゝつて爪もなくお千さんが来まして
から。お客さまハ何方どゝと咲てもア、機嫌も宜うございません
のサ。誠に悋気ハおいてアありませんが「そりやアお前自
由だと云ますから。まこと気に機嫌でも直させやうと。迄で知らし
ねへと云このごらうぞ「アレサモウそのやうに悋気して
下さいますトひよつと火入に手を掛して「エヽ貪欲が

刻粉へノウ。烟草の火も何にもならねへ。彼様に大勢
居なさつてもト掌を丸くしてうち鳴せば。ハイ〳〵と
答へて来る下女「コウ〳〵よく熾つて火を。そうしてと
頭も来ませぬ。然して酒のお肴の。お誂へがあるでござらう。
大造な肴がつまるか「左様〳〵今日ハ嘴物もなし。酒
吉生ても飲ませ。只呑しと仕舞ふと思ふ。迄で静
かに飯を重ねて。どせと分付てゐるさア茶「ヲヤ〳〵大
雨でございますか。然し雨ハ降し淋しからう。何で

旅客ハ水浴ませうぢやァごぶのませんろ「ナニそれよう
ろ嘲しが宮のヨトいろいろお千ハ廣藝を掌へ我て
指出し一人ら日い子お政さん。之法あ〜のお嘲しごとサ。
その稜りでお穀ゆ。ロ猪ハ宮ゆうハ高ゆ一とコ一それ
で写〜。ま〜自己と対対ぢやァ。恵嘲しが理ハ落
るろう。お方ゆろ〜ゆで呉ゆ「ハイ今化粧をして服
まし〜ろう。恵ハ来りません。ま〜且那更ハてゆ。ア
一ロあごとま〜ナ「依とゆ〜何ゆハゆ。酒気がるく〜

ちやアイウ「千「お乗りゲ渡りませんろ子ヨまく「依「サア政彦
一ッ呑ホヨ「オワトちりまん ホンニ 数とゆ〜ゆ公ゆまを彼
処の工秋ゲ。謀ハ感ろうで あろうまろ〜とっけゲ。不殘教て志
まひま〜ろ子。百ゆで物晩い冷つ〜ゆうハまりま
とトのゆ形お方ゆ出来ゆと一「あんごお政さん月月の
ろうをつまいゆうハ品人のうエ。年を元て出流まごゆ
の八十五六の時ゆハゆ。お正月ゆ。お晨白ゲ。謀ハ治を
ゆ〜。モウ我件嘗ると正月ごろうと。そをゆっろうゲ

苦不為のこう今うぢゆアが幸正月あんざアゞ生きくつ
てゆ宜とゝろへ。稼く気が揃るゝ「まうぢく」正月い
滅多不為めゝ。その中ゆアア長風ゞ吹て来ゆ事のを
ゆ彩くいサ。彩く丈とゝび今月食不彩しとゝ今ア
他でゆ彩へ金体異へうち不仕とうゝゞ。どうせお政
ゞ往めゝうゝ。今まで実へ凡合しゝゞ吹ゞ病人ゆ大
分快クて一人で宜隠へゆ往るきうゞ。モウ直旅ゆ
アゆアア大丈夫ざうゝ。何と二三日のうち偖して熟海の

湯へ往うとゝろゝゞ。ゝゆ不彩ち夫アお政へ勿論。お方
ゆ個と孫不為ゝゝ下の間長さんゆ連て往て彼の
ものへ仔細ゆある事へゞ。お政房何指ど往彩へう「
為りサ吹不吹とゝうう。為へ不アとゝゆへゞこのゆせん
ゝう往ゝとさゆの紀ゝへクト些口隠るを引ゞうて「モウ
おお出病人へ彼西ゝう為ゝゝ来ゞへう。お方ゞ及
ゆゞうゆアゆ後のゆ不。不自宜ゞうゝゝゝゝゝゆアお
ゞ。往て為ゝうちゝレ彼挨さんを教んでおきゆアゝく

ゑゞが付うつ。おあうゝ丈ア結ゆ宜「左様ゥ手様
ホ人ゞがあるゑゝ。マア そゝを彩むとして墨繪お為
ホせエ。そゝ丈ア喜くで彩くしホたゥ。愛と考ゥホゆ
ちゆア様ゝ。生一こらゆ海いをゝゞ。その湯宿ホ森
ゥ揚んで暴て約丈網の紙ゆアゑる。丈ゞ帰りゆア
ぐんゝと。生と魚の摂元ヨ。丈ゥと湯の沸く新ゥ奇
物稀代日本廣ゝとゆ二新とありゝ志様。時と限
てこゥゑゝと。そゝ丈ア法盛ホ勢ひゞゞアゝ彩ゝたゥと

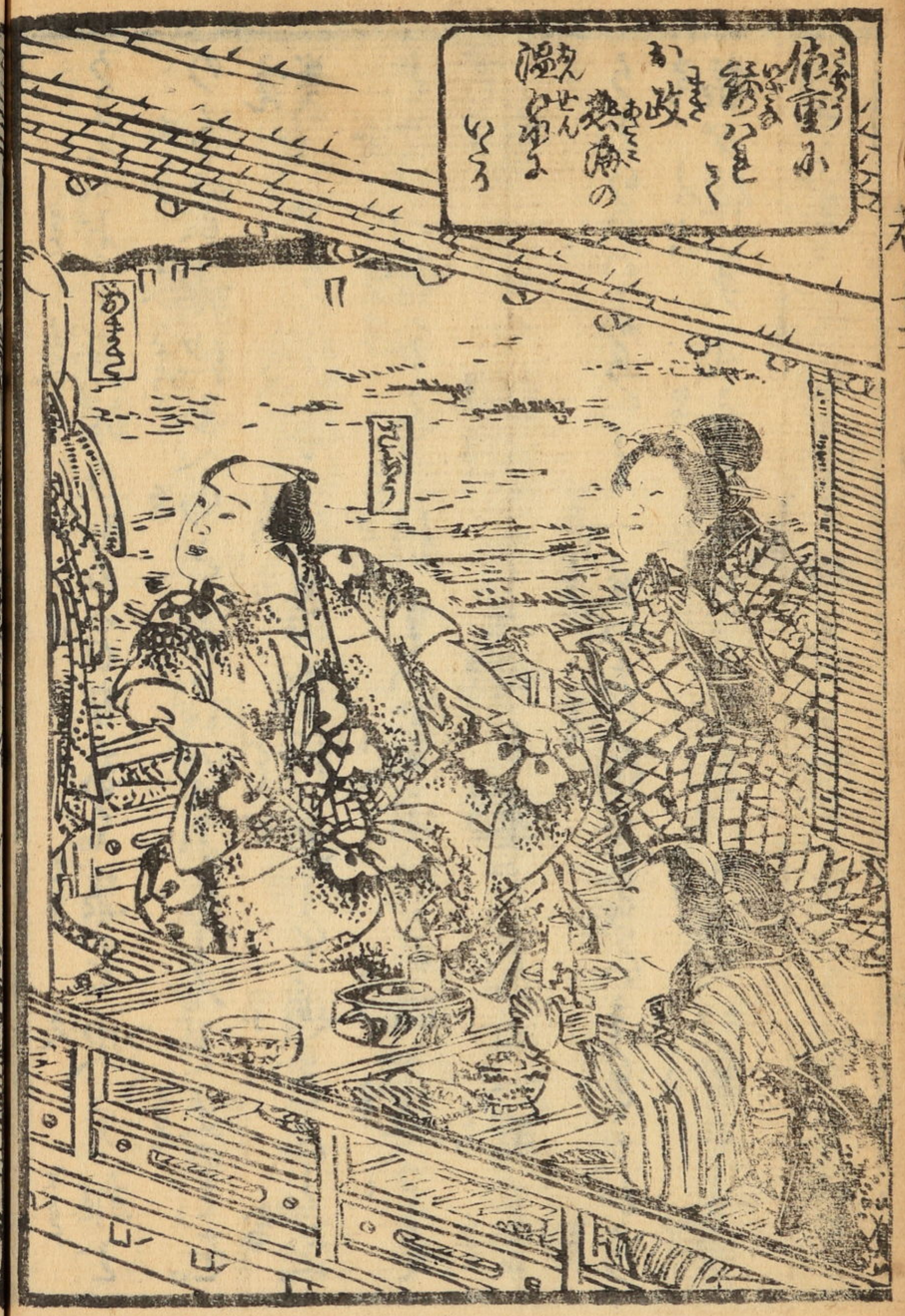


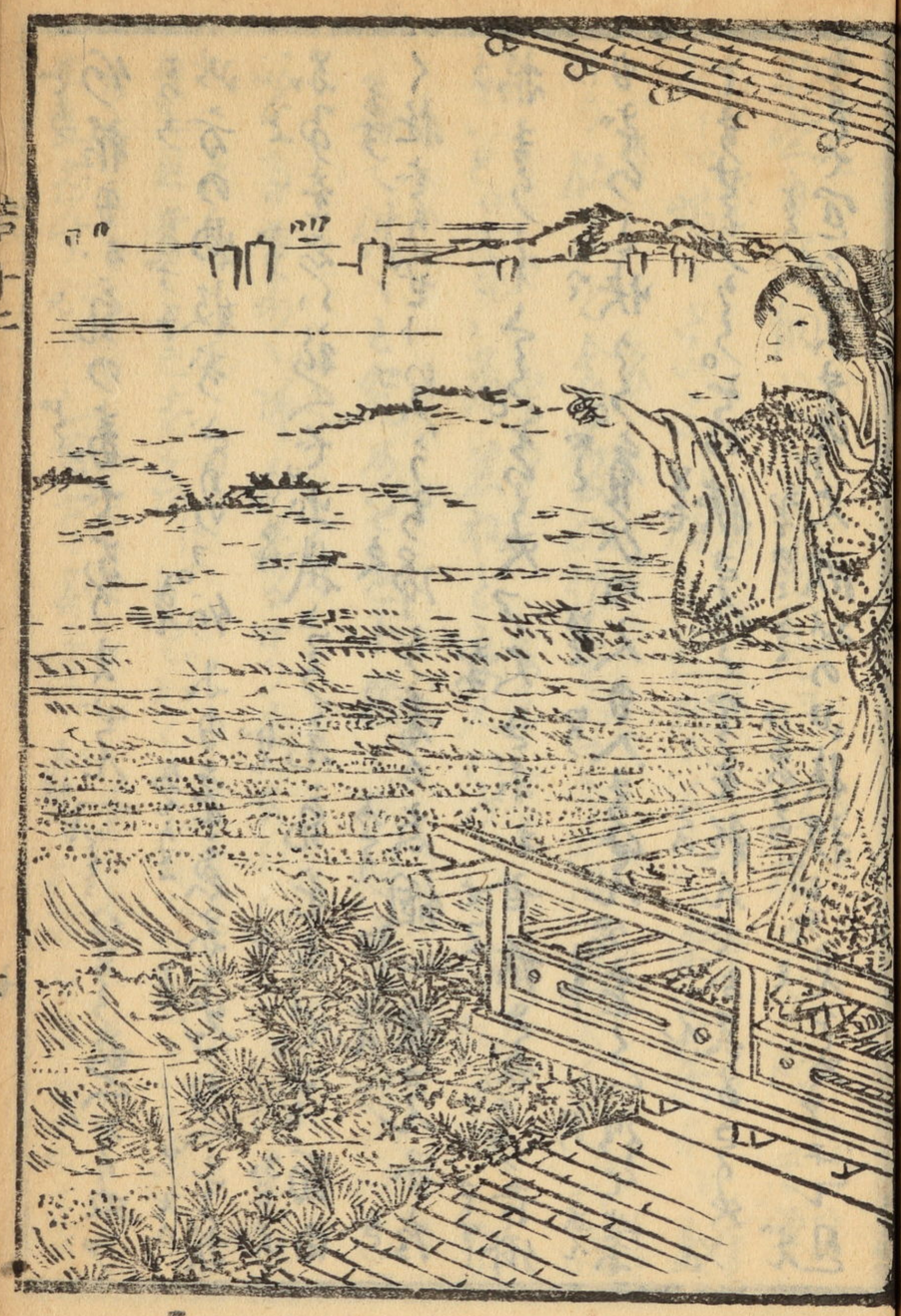
だ丈ア徒様ゝ。一新ホ徒と極ホせエ「お為ゲモンお止
ホゥるとゆたでお止ホゥるゆゝ。ゆゝ新ゝとゆゝ下の月義さん
あんでゆ。是非徒ゝとゝ此ゥるゥゝ。朱ゝてホしてお在ホ
ゥゥゝ。まゝと喜俳どゆゝゥ勿論サゥゝウお方さん「実ホ女
だ丈ア徒ゝゆゝてお政さんお生ヨト勧めゥゝとてゝ彩ゥりを
ゆ。右ホ左とりひゥるて。ゆゝ云て最ゝゝゝ彩ゝ家の佐重。孫
を此方へ連ゥゝて一千ゥ様ホ久ゝゝかゥゝ丈アーゝ様ゝ彩
と徒ゞマア二日。帰ゥゞ二日彼方ホゥゞ。四五日とてゝざゥと

九月。十月と云へば。男の足あるく一日路ばかりせ
ばとぞうぞうぶうぶうと二月がうの夫ア樂みのサ。あ後
を引て中七日サア後と究あせエ。そう処で病人の夫ア
この壊ぶうぶう云ばいうの初さ弱くぶうぶう。お方支個
仕様ア萬ちうと云て又ア家ちもとアア解知して居
ますと支あるこ今番波様ア。金さん不解ーませうトお政
ど返辞申ぶきぶ支個い歩て来ずど不。了得お政
申ぶ程様ア。達て否とはいそそと私ど。あれ妻を免



うとて。ぶー安堵のその百日あく。昼を更る雄士
の多ぶ。旅地ふへ出て来ぶ。いつ不あんと支のを。
業ぶらうとてふは百義居ぞ。何ア率して通さんとぶく
ど実ふ難方あー。位生ハ業ハ覚ふぶくお政ア新ア
何ぶナその迷惑ら何は塞ぐふわく取て食
うとりひハ去ぶー支い方招ぞどぶいまとぶ。お方
招ア伝実ふ。云て下さることをバ可ぞ。お金ぶうア項
いうぷまこ今回は来招あうみまんのぶ。


お政



何事も病気の毒でござりません「旅　いへ／＼ありがたへ。その外ア
此方の物数寄ござりやす。何にも重宝なものアねへ。主稲
なにさま出ぬ様へで。出掛けて元気を出して。チト面白
く性分ゼトいふうちに帰り来る者多「金さん不左
招まうしたらぱそのア大きにお世話さま。モウ吾鄙
ものと快くて会ひの人も入ませんが。宜しく待て業
上ませうから。その扶きんとやきを頼んでお呉なさりやア。
宜しで宜しござりまする上大飲込の四挟拶。シテうんアヤアテテ旦

招也も仔細ハござりませんヨ「左様かなア重々
ど。イヤ猫がござい成し冷て世擬くして来て呉なト更
より飯など食ふ家へ作主いかに家へ帰り多くお政
それと元気ハ旅先れど。良人いふーの仔細あげないへ
不依て能々と究め。其も不能ても親未萌の筋力と
猶てるものにハ帰り来る男子よりハ。住一人の様を務
めて且着ことをおもしけるが。かくて一月二月を經て。いんく
出立なすべしと家出を差づつ　お千お万もまた毎不来り

て行きしと譚ハ所へ手の達くと読ぬもの人世諺の仕
損も。お政が拍子いとさしく心なき済し思ひなりし縁その
日ハ猫まさに紀より。良人金を助にならきを告。翁ひの入
らハ心に及ざらん。旅宿支掃ての地ハ四よく鎮に行ぎ乾
ミ。こなたく一度に出立て小田原まで八岸海屋まで整
海の屋に泊まれバ。山海容くまでは海色道に雅致あり
なからん家の待遇の海衣や浴の小当に波うちよせ
漁子舟の往きかふ眼をさへぎるのも白帆の影が漣よりみえて

波に入る。思ひなき身になるなくバ。争うことしうへざらん。
依然海なる湯宿に甚て。依金ハ更に惜気なく。金銭
をまき散らせバ宿ではおさとくり誠大きなおとも。その歓待の大かた
ならず。漁の息ハ猫欠けに何ともなく詰込てで日毎の
酒宴もなんなく。実に世界の歓楽いでで極まるん
説へ。依金ハ元と見ハ箇斗りの。企まるも洗なりず。何
卒お政かんをさてまでに入らんと忍への外なり。されどバ
且者も新よまれ。窮に所にお政ハ宵より。張つけるを

と酒をすゝめ。その座ふかまるまゝに。傍ふかきふ座
敷あり。燈火もあるべき時けはひ。隈まるまゝに僥倖と。
密かにふ逃来り。手枕をして在ける所へ。徐くと来る
人の気勢ひ。誰ぞとつゝまれど生の時。薄暗くうちふ傍
へうつり。ひつくり抱くふ依主まゝり。逃んと出ればこそ逃しくい
せざる。恨恐ふ女児うゆのぞのぞりふ。変さ由ふうて。
中妻時併き居うけり

第二十四回

再視お政い今宵の時宜。網ふ羅つゝ魚あるべい。
ふ密ふ引ふ仕。ま夫遁るべき方ふあれども。一寸伸
まず尋延るゝ。蟹へふさ。ものふあるべ。遁ても果べき方ふ
あるこゝ。一まづこを遁てつゝ夫と。忽地新を新ゝ
て「おあ指ゞ先ゝ。ふ指あるの主彼見と。云て下
さるお志い嬉しいけれど男い魚性。経容させて笑
ゝまうゝと。ゝひまんうゝ言ちうつと宜お遁辞申ひ
ませんが。見ゞまゝふお云あるのいより夫で申あり

まんまのうそ。今日と又今日ハを究めて。おゑのあるまゝ
あるませうト半日笑ひ蔓示くと「何招」て左招
の気ふあるく。親ぐハ日程ぐある。幾回とまるく反対
らとて。程懲めせぞ右のとこのとおのお法で気
を操のを。笑ふ稼りこんぐ遠ひ。自ぬふ
あるこの胸を。唐竹割ふして丈まくこてと
悦ぶ作主「吾俳ぐ新ハ。治で舌とふ
ハません。番波下の浮多場へ。作て来るうちおお招い。

てふ待て。お吳あ方の「作」ハ何時まくも治て居
やうぐ其く蹣しそまあるぐハ。今回いモウ合点し
ね「せ」アレまくそ招あとを。お云ぐ。彼方と遠って何
処へぐも。逃ぐ祈いあるまの。何ぐ蹣しますのう「丈」
あう早く作て素ふト捕へとるを放さまて。お汲い
槌ふ盛まる。鑊ハ川へ放さまる。ん地ふるくて早と
強山。下の社会の隅のうく。遠ふく暴風の法ふう。
まて三の一旦遁まて也。吳ハ後い何招せうく。猶ふ

思案のあきあり。で孫俺と万事を見て、その
まゝを思ひ浮べ居る。依て人妻時まち他と人らくと
云をあせる。扨うら見の者さく。蹴然として奉る人を
つくづく見あんお政ホそ。晴ゞうあるべうくことを見て其失
を食こてひつてうあ家ひ「依さきん正実ろ工。私ま夫ア
何振ひ受らくゝて。まゞ何振ひ振ひますヨ」「ハテサ者
云言葉をいんぜ。正生てねくあのが。見わとまゞ不乳を
探ひ。夫ちゆア形せうこの胴巻不為用のを元ら

二朱金で。七十五両入まてあるら。こをそうう敬け
ろう。若自己が隙乳あろう。返すあゆア及ぶ程。依今
盤ろうを食をして。おおあ方ろ厳ゆア者ゆゝ出た
胴巻の主こハ誰の者ろ「おろ何ひおお振今ろ敬こを
を敬うろうて。受ろ実言ゞ何初ま世う。我こを
ゞふお云ホろろ敬てあまんヨトこをバ依
主い怠敬て「金ハあろう命ゞ。異ろこを云ろう
惜ろハ移ゝこを。思ハ自己ゞ伝実敬ゞろこア

情深くトのひて室処へ射まとる。汝も素月の袷衣
かさしく神の接足香中。又不ゑくぐと猛しくて。ひ
ある義を未結びけん。そこ信ぞそこ不熟腦して。お後も
知らでありけるが遂不結の変やそこん。耳不咬えて記ん
しさまぞ。まぐ彷彿と美現の。さうひも分である所へ。
端麦英藥の乳吾きを女。眼不ありくと遊ぶ中とて
作きうく実け吾ハくまを日金の親青大士ある。汝お改
ゆ多香不怒ひ。坊ひ分不手貞茅の人不操を波ら



せんとその眼惜む不ぼうまとく彼もまるく汝ら君に。
新命を繋ぎ。良人の藤書快く示ゑ閑源。て
を吸てきうく不然めば仮一今青不迫ア一雅大
枚ゆとしてお改不損分その情怨い果さいうとば。
お改ハとの者神通まりて。良人の侍へ徒ーゆこう。
そ不晨ゑねを驚くべゑ。新のこの者ぐ疑ひ不
ん祇概とい人ハ者不祇けー踊用の閑者金法
くも明日金の親音の厨子を冥ゑぐ彼処不あん。

こゝをうけ殺ひ賜せよ。吾絶文不申尽えるごとく。こゝ
に忽不現ある神通。今宵いづ婦女と現じうつゝ咲
うとおのゝバ服い美て入まゞいつ不申お政い居ル。屋
敷へ来りし若とゆいを見て容子をちらつゝ不敢驚
不あゝんゝ推量ゝ。こゝ不ゝ俵不外ゝまゝこの時谷
記出て佐ゝ主が不閑の嘲ゝを咲。こゝ兵衛不呆傍
おろう。さゝバ日金不立賦ゝ。後を抱ゝ佐ゝ人見
る不。示現不差りて歓喜大士の出ゝ不織ゝ胴を



不。金の多寡ゝ差りゝバ佐ゝ主ハ元来ゝゝ。お政が伝
ゝ見聞ゝ。ゝ感ゝるのゝゝ親喜薩摩の利益を受ゝ
けり。さゝて佐ゝ主ハお政のゝゝぬを不潜ん不かるゝゝ
その日熱海を発足ゝ各不後ふうち業て。船り北
ゝ不ゝち帰る。かゝてお政ハその後ゝ。船りのゝ不指
迫りて。ゝゝ処不詭ゝてゝるまでハ。ゝゝゝゝゝゝがその
ゝ不。深ゝる仏地のせゝ斗り。夜明の風の冷やゝ不。
襟を透せバ指深をせゝ。あゝんゝと続き笑め。ゝゝバ

こゝあん良人の俤ぞ、目がさめねば愛あるこゝろ。哉とて
ゆゝしき遠ひろ。月形は熱海に在しまゝ。時々陽こゝる
酒の香も、拘不殘りてありけるゆゑ。狐程不鮫さんし
うと。更不不審は晴やらぬ。その形間の隔紙を。まゝ
ゆとゝ開て立出る主平のこゝまきまと美うと怕ゆ作夫。不
光不蟲の根も深くぬぐう。麦下葉若主平いゝと
つゝて一雅方「サテ私は一昨日の。夕方こゝ来りま
て。美恩形さゝ女不お月不かゝる。此病気のことれ可つ事。



ゆゝ獺が雅ゝくれ苦労も。萬々弟知ゆゝ生ゝ。イヤ
その盛月は形遊さゝ女が。お柴ゝまさまて一の江まで。
お雅方索れて来りまゝ。史自お月不かゝる奴笑。
ゆゝ〳〵今回でゆゝ。まゝ〳〵ゆゝ獺は旧機猿
ゆゝ。美恩形さゝ女の旧病気も。八や六七ゆの旧金枝。
柴ゝはゝぐゝゝまゝせん。弟は月五日頃。熱海へお出
あさまこゝ。美恩形さゝ女のお嘲。昨晩の旧
沙汰も有。何時お帰りゆゝまゝゝト嘲しの

中ゝ金を分。月を送りて物うり「イヤお政が指さ
のぶ。此頃由重郎と稚くのぎ者でモウ子刻時
ぐれ。藤こぶを出まで泊まる。食も一所ゝ帰つて
のうト信さこの方由合点ぶ。荷ぶ出を要しく
嘲しで不洲ことゝ金を分ハお政ゝ。
今田重郎ぶ探して来こと。家老母さんのお計らひ。
この内れ家中の者が授番へ往こをを為らこ時
きをこぶ。お政をつんうけこうう。宅へ帰つてこの嘲しを。

お雪おくさこ。母さんが。こ処ゝ居る不遠ゝ。
方中ゝ往て来個こ中。連て来てくきこお金まで
てこへ走ゝを知ゝきつこゝ嘲しおこの方ゝ
指長く持ておくまる訳ぶハ出家老角の初
年。まア最楽族ら宜。モシ居所ゝ来まてくあく。別
陰科の方の涙ぶこる。表向い病こ乳ゝ。宅へ改せ
伊細ハ方いく。内こ。ハ沙汰ゝ。あり雅の
母ぶハ方いく。左指して居ゝ。伊つ

佐重
心を
改め
筆て
懺悔
を
おまん
さちよ
吉せん


今之介
ゆく末

冠りて。先て不お秘もあり。マア萬ろうて見お世と
と。出て来て請ぜよと下し。何ろ何まで有難さ不淺
を拭ひ用もあり。
と。不孝の子さん。惜しとも。ろくでなしまで不世
恩を下さる方作おの下泛ろ外お詞あり。ろ金ろ分
ろ。商の主不者と。貧乏人ろ。大ふさ。も変。
さ〳〵徐ろ立支度。者不暫ア用ーさお。この日も
書不及ふ。動也く作る作業の一連。お政がろ不ある

を見て。まづ八谷安堪お。そは懺悔あハ心を立逆の。
羅さん消ると。吹あまぶ。今ろろんを改むる殺しと作業
ろその家のこと。在し次第を物語まづ。吹人奇妙の心
ひを。お政がろく帰りしも。親吉薩摩のお計らひ
ろろ。感涙お哽びけり。かくて作業ハ銭ろ金二
千匹を友個お修り。ろ見ろ長く出人せしぞかく
て金ろ。お政の友個ハ。ろ母の恩ざるんお
歓ぶこと限りもあく喜くきまお病ひさ八九ろ

をゝうて。丈より弟三日めに。てを立出まゞの同毒の。業
雲が方へ到足ゐき。丈より内く鉢ゝ降りの全快の話
改めて。お設と猶綱をとり結ひ男女あまくとの子を
設けて。めでゝ紀春のとむらゝとあん

清談和歌翠巻之十二 大尾